

23-03-26 仙川教会 「ぶどう園のゆくえ」

イザヤ書 5 章 1-3, 7 節、ルカ福音書 20 章 9-19 節

受難節第 5 主日の聖書日課は「ぶどう園と農夫」の譬えである。

★「ぶどう園」は旧約以来、神の民イスラエルの象徴。しかし南のユダ王国を含め、彼らは神の愛に応えない歴史を繰り返し、ついには裁きを受けて滅ぶ。主は「よいぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった」。「『裁き』を望んだのに、見よ『流血』。『正義』を望んだのに、見よ『叫喚』」。神の民ユダへの慈しみとそれを裏切られた神の落胆ぶり見事に描かれている（イザヤ 5:1-7 節）。

★ルカ福音書の「ぶどう園と農夫」の譬えは、ユダの指導者たちの悪行に焦点を当てている。ぶどう園の主人は神、農夫は祭司長や律法学者たち。送られる僕は神の使い預言者たち。神がユダのよき実りを求めて預言者を送るが、ユダの宗教指導者たちは暴行の末追い返す。最後に「愛する息子」に希望を託すが、これを殺害してしまう。この譬えが自分たちへの「あてつけ」と気づきつつ、宗教指導者らは実際に、主を十字架に掛けるのである。

★ただルカは譬えの結びに、詩編の言葉を引用する。「家造りらの捨てた石が隅の頭石なった」と。その意味するところは「宗教指導者たちが主イエスを役立たずとして捨てたが、この十字架のキリストが救いの土台となった」である。詩編は「これは主の御業、私たちの目に驚くべきこと」と続ける。まさに十字架の出来事は、人間の恐るべき罪の仕業を、神がどんでん返し、救いの基とされた。これぞキリスト信仰の極みである。

★これらのぶどう園の譬えは、ただに神の民ユダにとどまらない。天地創造の初め、神が「良し」とされたこの被造世界が神のぶどう園である。創世記 1~11 章は、人間の罪によって汚染されゆく姿を描く。あのノアの洪水物語しかり、バベルの塔は人間の驕りの極み、神の怒りを招き、「言葉」を乱され、互いの意思疎通が図れなくなった。なぜ人は争い、愚かな戦いを仕掛け、なぜ和解が図れぬのか。神の似像としておごり高ぶる人間が支配するこの世界というぶどう園はどこに向かうのか？ 明日に希望はあるのか？

★神の民イスラエルの「ぶどう園」は荒廃してしまっただが、この隅の親石を土台として建てられた「新しいイスラエル」は主の教会である。神が植え、慈しみ育くまれた教会というぶどう園はよい実を結んでいるか。今、日本のキリスト教会は伸び悩んでいる。でも、恐れるな！主イエスは「私はまことのぶどうの木、あなた方はその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」と約束されている。

★仙川教会というぶどうの木が主日ごとにみ言葉に養われ、この地にあって福音の証を建てていくこと、子供の家というぶどう園を育てていくこと、さらにみ言葉を携え社会に出てゆくこと、世界の平和について真剣に祈り求めこと、そうすれば必ず、キリストの枝に豊かに実を結ぶことができる。まことのぶどう園の主人なる神は、ぶどうの木である教会を通して、この世界のぶどう園の行方を確かに指し示してくださるであろう。感謝！